

# 大正・戦前昭和期における「大田植」存続の地域的意義

— 広島県比和町森脇の畜産業との関係から —

高野 宏

- I. はじめに
- II. 調査対象地域の概観
- III. 畜産業の発達と大田植の習俗
  - (1) 大田植の起源
  - (2) 畜産業の発達
  - (3) 式次第・表現と畜産業の影響
- IV. 大田植の主体をめぐる社会状況
  - (1) 獣医をめぐる社会状況
  - (2) 家畜商をめぐる社会状況
  - (3) 社会組織と社会構造
- V. 大田植と地域社会との関係性
  - (1) 大田植の社会的基盤
  - (2) 大田植存続の地域的意義
- VI. おわりに

## I. はじめに

中国地方の山間部には、「ハナタウエ（花田植）」や「ハヤシダ（囃田）」などと呼ばれる特別な田植の習俗が伝承されている。田の神（サンバイ〔三拝〕）を祀り、五穀豊穡を祈願する目的があるとされ、各集落の田植が一段落する半夏ごろに開かれていた。田の神を降ろした田圃で代掻きの技巧を競い、その後、着飾った早乙女がサゲ（左下、田植の指揮者）による音頭、大小の太鼓のリズムに合わせて苗を植える。その華やかさから農村の初夏を彩る風物詩として広く知られ、農家の数少ない娯楽として長らく愛好されてきた。

また、出雲・備後地方には、田の神に加えて牛馬の神（大山智明権現<sup>だいせんちみょうごんげん</sup>など）を祀るものもある。それは、役畜として重要であった牛馬の安全を五穀豊穡と併せて祈願するもので、儀式的目的から「ウシクヨウ（牛供養）」や「クヨウダ（供養田）」の名称で呼ばれる。

こうした中国地方に伝承される特別な田植の習俗は、学術的には「大田植<sup>おわたうえ</sup>」と総称されており、これまでも民俗学や芸能史の立場から研究がなされている。民俗学では、大田植は日本における伝統的な田植の様式であり、典型的な稲作儀礼とみなされてきた。そこには「日本人」が行ってきた稲作労働の形態が保存されているとともに、式次第や表現のなかに稲作民としての「固有信仰」が残されているとも考えられた<sup>1)</sup>。これに対して、芸能史では、大田植にみられる芸態が田楽史を明らかにするための重要な手がかりと考えられてきた。現段階においても、それが日本固有のものか、直接に田楽の成立と関係するのかといった点については議論が分かれているが、平安末期に貴族たちの間で流行した「田植興」の芸態に比定できることでは概ね意見が一致している<sup>2)</sup>。

大田植の習俗に対する調査・研究は、以上の学術的な見解に基づいて推進されてきたが、そこには一つの大きな問題点が存在している。それは、従来の大田植研究では、儀礼の様式や芸態といった大田植そのものに注目

キーワード：大田植，地域社会，畜産業，獣医，広島県比和町

が集まる一方で、大田植を地域社会との関係性のなかで捉えようとする姿勢がきわめて希薄であったことである。具体的にいえば、第一に、習俗の存続を支えてきた社会的基盤（社会組織・社会構造など）に対する分析の欠如である。第二には、大田植の式次第や表現が人々の日常生活の何を反映し、地域社会に対していかなる意味や機能を持っていたのか等、大田植の地域的意義を解明する試みがなされなかったことである<sup>3)</sup>。

以上の問題意識に基づき、筆者は戦前昭和期における広島県豊松村川東地区の大田植を取り上げ、地域社会との関わり方の観点から考察を行った<sup>4)</sup>。当時の川東地区（全戸が専業農家）は複数の同族組織によって構成され、各同族組織におけるヒエラルヒーの頂点（本家）に近い家によって大田植が主催されていたことを明らかにした。これを踏まえて大田植の式次第・表現に対する考察を行った結果、そこには著しい社会構造の反映が認められ、大田植はその宗教的・非宗教的な表現を通じて、社会構造を強化・再生産する機能を果たしていたと考察した。前稿では、このようにして大田植と地域社会との密接な関係性を指摘することができた。しかし、そこで示し得たのは各地で行われていた大田植の一例に過ぎず、より一般的な議論へ進展するためにも、さらなる事例研究の蓄積が今後の課題として残された。

そこで本稿では、第二の事例として、大正～戦前昭和期の広島県比婆郡比和町森脇（現・広島県庄原市比和町森脇）における大田植の事例を取り上げ、考察を試みる。これまで典型的な稲作儀礼として捉えられてきた大田植の習俗は、森脇では「ウシクヨウ」と呼ばれ、地域住民と牛馬との関わり方、とりわけ当該地域における畜産業との関係性から捉えられなくてはならない。こうした、大田植を存続させた地域社会の構造が前稿とは異なる森脇を新たに考察することで、地域社会

の諸条件と関わりながら存続する大田植の姿を一層明確に示すことができると考える。

なお、大正～戦前昭和期という年代設定は、戦後の社会変動や文化財保護運動の影響を排除する必要性と、十分な聞き取り調査が可能な年代の上限を考慮したものである。現地での聞き取り調査を主とし<sup>5)</sup>、統計資料や関連する文献を補足的に用いる。

## II. 調査対象地域の概観

比婆郡比和町は<sup>6)</sup>、広島県の北東部、中国山地の南麓に位置する（図1）。北部には吾妻山（1239m）・立烏帽子山（1279m）・黒石山（1022m）の三山が聳え、そこに発する比和川が町域を縦断している。古頃・木屋原・比和・三河内<sup>7)</sup>・森脇の5大字からなり、総面積の9割が山林によって占められる山間部農村である。江戸時代には中国山地に位置する他の村々と同じく、たたら製鉄による鉄山業が隆盛を極め、のちに比和町となる地域には、当時の恵蘇郡における半数以上の鉄穴<sup>8)</sup>が存在していた。また、中国地方は和牛の生産地としても知られるが、安政年間（1854～1859年）に、名牛の血統として知られる「岩倉蔓」がこの地で作り出された<sup>9)</sup>。明治中期に鉄山業が衰退すると、比和町は仔牛の生産・育成地として著名となった。

比和町最北端に位置する森脇地区は、吾妻山のふもとに位置し、島根県と境界を接する。上八川<sup>10)</sup>・石ヶ原<sup>11)</sup>・久泉原<sup>12)</sup>・山王<sup>13)</sup>・永原<sup>14)</sup>の5集落からなり、比和川上流部の細流に沿うようにして家屋と耕地が一列に連なる。地区の範囲は東西約7km、南北約10kmにおよび、大半が山林で占められる。家屋は標高400～500mに立地し、気候は年間を通じて冷涼である。とくに冬季の冷え込みは厳しく、積雪が1mを超えるところもある。厳しい気候条件のために、大正～戦前昭和期には二毛作のできる「麦田」は存在せず、一帯は水田単作地帯であった。江戸時代には森脇で

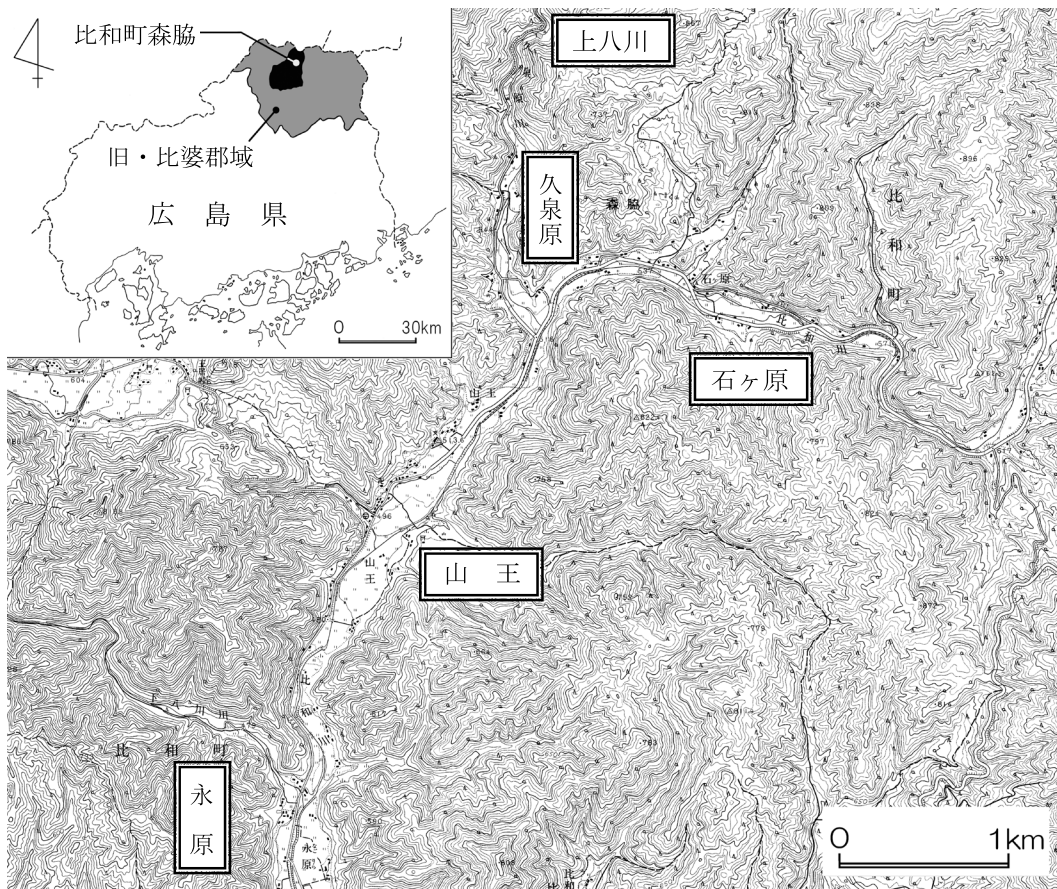


図1 調査対象地域

出所：国土地理院発行1/25000地形図「比婆新市」・「比婆山」・「比和」・「西城」。

も鉄山業が盛んであり、大鉄山師の名越家は、分家の2軒とともに森脇で強い影響力をもっていた。しかしながら、洋鉄の輸入によるたたら製鉄の衰退はここでも避けがたく、彼らの経営状態は急速に悪化、大正期には倒産したとされる<sup>9)</sup>。

森脇は大正～戦前昭和期にいたるまで、地元で「ウシクヨウ」と呼ばれる大田植を開催した集落としても知られる。筆者の聞き取りでは、1915(大正4)年ごろ、1922年ごろ、1933(昭和8)年の3事例を聞くことができた。特筆すべきはその主催者であり、第一の事例では山王の獣医H氏が、第二の事例でも石ヶ原

の獣医N氏が自ら出資者となり、大田植を開催した。同地の古老からは「ウシクヨウはハクラクが行うもの」といわれ、その他の職業の者が主催者となる事例はないという。本稿で考察の対象とするのは、こうした獣医主催の大田植である。なお、第三の事例が行われたころには、当地での大田植の習俗は下火になっており、比和公民学校の農業専門教諭が同校研修農場において伝承活動を行うほどであった。すなわち、伝承活動に関わった愛好家たちが町制施行の記念行事として、町内有力者に出資を募って実施したものである。

### Ⅲ. 畜産業の発達と大田植の習俗

#### (1) 大田植の起源

比和町には大田植の起源に関する次の伝承がある。

江戸末期、出雲国簸川郡の林家に「喜平」という人物がいた。彼は大山の牛馬市に出入りする家畜商（バクロー〔博勞〕）で、地元では農家に自分の所有する牛馬を貸し出す、いわゆる「牛主」でもあった。喜平は1869（明治2）年に他界するが、それまでに幾度かそうした牛馬を集めてはウシクヨウの儀式を執り行い、それらの安全を祈願していた。そして、彼には「早助」という実の子がいた。この早助が、明治になって「若林」の姓を名乗り、比和町布見において家畜商を開業した。早助はさらに、父親の行っていたウシクヨウの儀式も受け継ぎ、地元の獣医や同業者たちと相談したうえで、バクローウシ（博勞牛、家畜商が所有している牛）を集めてそれを行った。それ以来、比和町では、家畜商や獣医らによってウシクヨウが行われるようになった<sup>9)</sup>。

ここに示される大田植の在り方は、これまで一般的であった大田植のイメージとは大きく異なっている。比和町へは家畜商によって大田植の儀式が持ち込まれたこと、当初は家畜商が自ら所有する牛の安全祈願のために行っていたことが述べられているからである。

畜産業と大田植との関係性を示すものは、大田植の名称や主催者の問題だけではない。大田植の式次第や表現のなかにも、両者の強い関係性を明確に看取することができる。

#### (2) 畜産業の発達

当時比和町が属した比婆郡は広島県の最北端、中国山地の最も山深いところに位置していた。同郡の地勢について『比婆郡誌』（1912年）は、「中国山地の高嶺、略、東西に走りて…備後国に於て最も高峻なる地方」としてい

る<sup>10)</sup>。そうした土地柄のため、都市部との交通が発達するまで商工業の発達は芳しくなく、『農事調査書』（1891年）に「交通運輸便ナラサルカ故ニ事業振ルハス」と記されるほどであった<sup>11)</sup>。とはいえ、郡民の大多数が携わっていた農業も、彼らが生活するに十分な収入をもたらしてはくれなかったようである。先の『農事調査書』には、「農民ノ如キハ…概子収入多カラサルヲ以テ其生活ノ度最モ低ク縣下郡市他ニ比類ナキ景況ナリ<sup>12)</sup>」などの記述がある。それは、山間部で耕地そのものが制限されているからであり、気候が冷涼で積雪が多く、二毛作を行うことのできる土地がほとんどなかったからである。そうした比婆郡の厳しい農民生活において、数少ない副業として重要視されてきたのが鉄穴流しや銃の運搬、炭焼きなどのたたら製鉄に関連する仕事、そして仔牛の生産・育成に特化した畜産業であった。

比婆郡で畜産業が発達した要因としては、放牧に適した中国山地の地形・地質など、もともと畜産業に適した自然環境が備わっていたことがある。そのため、同郡における畜産業の起源は相当に古いと考えられるが、それが明確に発達し始めるのは江戸後期、化政期（1804～1830年）になってからである。宝永・正徳期（1704～1716年）に0.3頭であった一戸当たりの牛飼養頭数は、この年代にかけて0.9頭に上昇している<sup>13)</sup>。そこには、先の自然環境が有利に働いたことに加え、牛耕の普及により和牛の商品化が開始されたこと、さらには鉄山業の発達にともなって大量の駄獣が必要とされたことが主な要因と考えられている<sup>14)</sup>。また、石田は「深山幽谷の処、若此業なくば禽獣人にせまり、作物も荒るべけれど、幸い古来より鉄を生ずるを止まず、木を筏り、炭を焼きて、熟鉄を製す…」という『芸藩通志』の一節（のちの比婆郡の一部となる奴可郡の記述）を挙げたうえで、鉄山業の発達が木炭の需要を生み、そのことが薪炭

林の放牧地利用という中国山地に特有の生態へと展開したと述べる<sup>15)</sup>。このように、比婆郡の畜産業はたたら製鉄と密接に関わりながら萌芽したといえる。

しかし、この時代の畜産業は種牝牛の固定など、畜牛の生産管理の面では成熟しておらず、生産・流通の組織も未発達であった。そうした意味において、比婆郡が産牛地帯としての確立をみるのは、政府の積極的な畜産政策が展開された明治以降である。たとえば、明治政府は1900(明治33)年に産牛馬組合法(1915年に畜産組合法に改定)を制定するが、それとともに比婆郡でも比婆郡産牛馬組合(1916年に比婆郡産牛馬畜産組合に改称)が畜産家(農家)によって組織され、牛種の改良や種畜場の整備などの事業が行われるようになった。さらに、1911年に家畜市場法が施行されると、同組合は家畜市場の経営に着

手する。4つの常設市場と9つの臨時市場が郡内に設置され、地元畜産家たちの手によって産牛の流通体系が整えられた<sup>16)</sup>。そうした畜産業の組織的・制度的な確立の過程において、同郡の牛飼養頭数や生産頭数、生産管理のメルクマールとなる牝牛率は、継続的に上昇した(図2)。また、同郡で生産・育成される畜牛は量だけでなく質の面でも向上し、戦前昭和期には、長寿・連産で、体格も大きく牽引力が強い「比婆牛」が中国地方一円で好評を博すにいたった。

このように比婆郡で発達をみた畜産業は、森脇の人々の生活にも深く関わるようになっていく。たとえば、天保年間に近隣の布見で「岩倉蔓」が造成されたのをはじめ、鉄山業が下火になった1887年には、住民一同が団結し、規約を定めて吾妻山のふもとに共有の放牧場(吾妻牧場, 226町歩)を開設している。

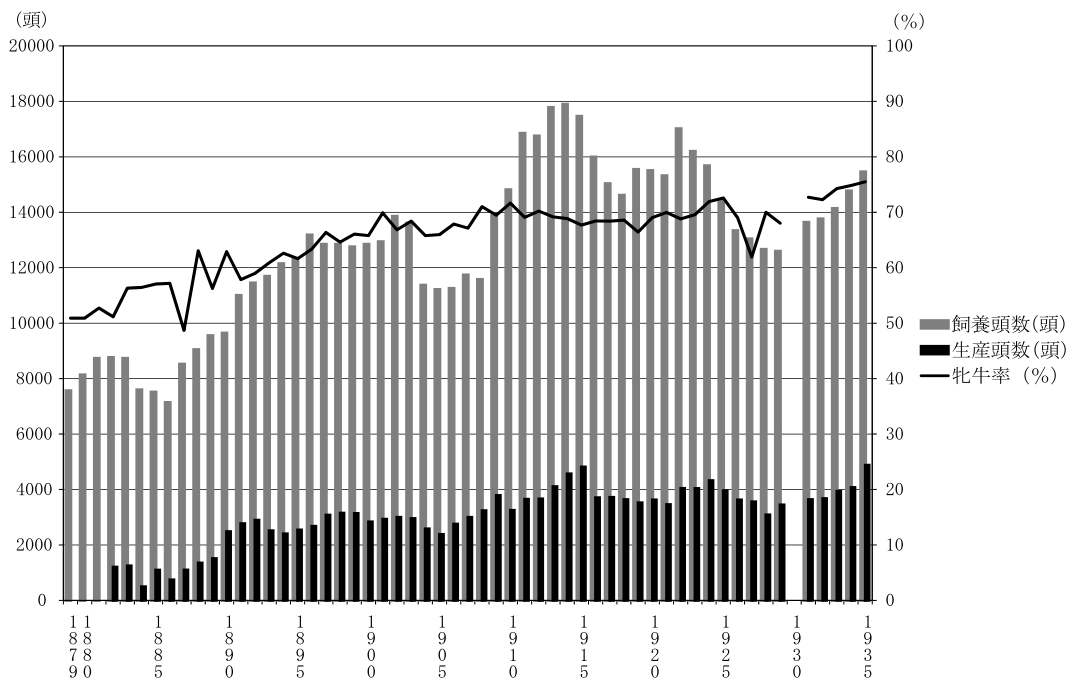


図2 比婆郡における畜産業の発達

注：1898年の比婆郡成立以前については、恵蘇郡・奴可郡・三上郡を合計した数値を示している。

また、1930年の全ての数値と1879～1881年の生産頭数は資料が欠損している。

出所：『広島縣統計書』および『広島縣勸業年報』より作成。

それは当時の郡役所の指導でもあり、鉾山用の官林であった土地を住民が借り受けて設置したものであった<sup>17)</sup>。これにより、牛の飼養が農家に広く普及し、以降、彼らの副業はたたら製鉄に関連するものから畜産へと転換していった。1930(昭和5)年ごろの山王を例にとると、34戸の農家に対して牡牛20頭(一戸当たり0.6頭)、牝牛54~57頭(一戸当たり1.6~1.7頭)が飼養されている<sup>18)</sup>。このように、大正~戦前昭和期には少なくとも1頭は牝牛を飼い、農耕や運搬に供しながら繁殖を行うのが一般的な農家の状況であった。愛牛家と呼ぶべき篤農家が地区に幾人もいたといい、現在では牛の飼養農家が少なくなったとはいえ、古老のなかには愛牛家であった人が多くみられる。

### (3) 式次第・表現と畜産業の影響

#### a. 大田植の式次第

森脇に伝承されている大田植の式次第は、①カサゾロイ(笠揃い)、②ミチユキ(道行き)、③田の神降ろし、④タナクグリ(棚くぐり)、⑤代掻き、⑥田植作業の6つから構成されている。まず、①では、大田植の参加者と代掻き牛が広場に集まり、田植作業で用いる田植唄や楽器の練習をする。②では、参加者一同が「クヨウデン(供養田)」と呼ばれる、この日のために準備された特別な田圃へ向かって、歌や楽器の演奏も賑やかに一列に練り歩く。続く③では、クヨウデンの脇に設置された祭壇(サンバイダナ[三拝棚])にて田の神(サンバイ)が、神官による祝詞の奏上・太鼓の演奏とともに会場へと降ろされる。その後、⑤の代掻きとなるが、そのまゝに④として、代掻き牛たちがクヨウデンの入口に作られた「ダイセンゴヤ(大山小屋)」という牛馬の神(大山智明権現[通称「大仙」]、以下通称にて記す)の祭壇にて祓い清められる。代掻きがすむと、最後に早乙女らがクヨウデンのなかに入り、サゲとの田植唄の掛け

合い、大太鼓・小太鼓の演奏も賑やかに田植作業が行われる。この⑥では、田の神の神威に関係が深いとされるサンバナエ(三拝苗)もクヨウデンに植えこまれる<sup>19)</sup>。なお、儀礼・祭礼では一般的な、参加者揃ってのナオライ(直会)は欠如していた。

以上が森脇における大田植の式次第である。これらのうち、とりわけ畜産業との関係でとくに注目されるのは、タナクグリと代掻きの2つである。以下、これらの場面について詳述し、その表現を検討したい。なお、ここで紹介する大田植の写真は、2008(平成20)年5月25日に比和町郷土芸能振興会の主催で行われたものである。

#### b. タナクグリ

タナクグリは、クヨウデンの入口に設営されたダイセンゴヤで行われる。ダイセンゴヤはその名のごとく大仙のための祭壇であり、神仏混淆の様式で、東西に並ぶ2つの棧敷(床の高さはおよそ1m)を一つの屋根でつなげた形をしている(図3)。東の棧敷はヒガシダナ(東棚)で神式の祭壇(神職の座)、西の棧敷がニシダナ(西棚)で仏式の祭壇(僧侶の座)となる。二つの棚に挟まれた幅2mほどの通路が設けられている。代掻きに参加する人や牛が代に入るまえに、この中央に設けられた通路を通り抜ける儀式がタナクグリである。



図3 ダイセンゴヤ

出所：2008年5月25日、筆者撮影。

タナクグリの際、東の棧敷に座した神職は祝詞を唱えながら通過する牛たちを大幣で払い清め、西の棧敷の僧侶は大般若経を開閉しながら転読をする。また、郷土文化保存伝承施設の特別展(1991年)用の冊子には、「神職は…一番牛から十番牛までには大山さんの祈祷札を、十一番以下には紙札を授与し、また十番牛までには小幣を授け」、「僧侶の側では…大般若経一巻ずつ牛の鞍に付けさせ」る、という記述がある<sup>20)</sup>。こうした儀式的存在が当地の大田植が「ウシクヨウ」と呼ばれる所為である。畜産家たちのあいだでは、これらによって代掻きに参加する牛たちの健康や安全が祈願され、将来の畜産の成果に良い結果がもたらされると信じられていた。

### c. 代掻き

代掻きの場面では、始めにシロプレーがある。式次第と同名の「シロプレー」という役職の人物(袴姿で烏帽子を被る)がクヨウデンの中央に立ち、会場を取り巻く見物人に対してツナデ(綱手)の紹介、イチバンウジ(一番牛)とシロナルメ(代なるめ)を務める牛の名前と所有者・追い手の紹介を行う(図4)。ここでいう「ツナデ」とは大田植で上演される特別な代掻きの演目であり、イチバンウジは代掻きの先頭を歩く牛、シロナルメは最後尾を歩く牛のことである。これらの牛は代掻きを成功させる重要な役であり、とくに衆目を集めるイチバンウジは見た目の美しさ・気性などの面から優れたものでなくてはならなかった。

シロプレーが終わると、代掻きの作業となる。イチバンウジを先頭にした牛の列は、追い手たちの手綱さばきに従って、決められたルートを進む。シロザイリョウたち(代宰領、代掻きの先導者)は、牛のルートを先回りして、急に曲がる場所などの難しいポイントに杖を持って立つ。畜産業が盛んで、農家で牛の飼養が一般的であった大正期には、この代掻きの場面が大田植の最も盛り上



図4 シロプレー

出所：2008年5月25日、筆者撮影。

がる場所であった。畜産家たちは自慢の牛を持ち寄り、代掻きに参加する牛の頭数は比和町全域から百数十頭にのぼった。そのため、かつての代掻きは地区対抗の形式で披露され、シロプレーもその都度繰り返された。

そのほか、代掻きの場面で注目されるのは次の2点である。まず、1点目は、代掻きであるにもかかわらず、牛には馬鍬をつけない決まりになっていたことである。古老によれば、この習慣は当地で大田植の人気の上昇した明治中期に起こったもので、それまでは小ぶりの馬鍬をつけて出場させていたことであった。沢山の牛が一度に代に入るようになったので、他人の大切な牛に怪我をさせる恐れがでてきたことが変化のきっかけであった<sup>21)</sup>。2点目は、代掻きのあとに家畜商たちがクヨウデンの周辺に集まり、農家と牛の取引を盛んに行っていたことである。イチバンウジとして参加した牛などは、代掻きの終了後、すぐにでも買い手がついたという。また、代掻きに参加する牛のなかには農家の飼養する牛のほかに、家畜商が商品として所有する牛(バクローウシ)が多く含まれていたともいわれている。

### d. 検討

まず、儀礼として大田植を捉えた場合、大規模な牛馬の神の祭壇の設営とタナクグリの儀式が注目される。とくに牛馬の安全祈願を行うタナクグリは、ウシクヨウの名称が示す

ように、大田植での儀礼の中心をなす。これに対して、田の神の祭壇は比較的小規模であり、田植作業においてサンバナエが植えこまれるという所作がある以外は、豊穰祈願を明示する式次第や表現は存在しない。すなわち、森脇の大田植は五穀の豊穰祈願と牛馬の安全祈願の2つの目的をもつが、後者の目的に重点が置かれていたと思える。大田植が家畜商によって伝えられたとする伝承、主催者が獣医であった事実からも、当該地域における大田植は畜産業の発達と無関係ではないと考えられる。

祭礼として大田植を捉えた場合、はじめに注目されるのは代掻きの演目が地区対抗で繰り返し行われたことである。代掻きが田植作業の準備という位置づけであるなら、執拗に繰り返される必要はない。それ自体が目的化されたショーとして理解するのが正確といえる。さらに、こうした観点から重要と考えられるのが、代掻きのまえに行われるシロプレーである。それは、演者対観客という場の構造を明白に示している。見物人たちは、体格が良く飼育慣らされた牛に溜息を漏らし、難しい演目の名人芸的な牛さばきに歓声を送っていた。一方で、シロプレーは牛の所有者や追い手を大々的に紹介することにより、代掻きの参加者の名誉心を高める。とくに自分の所有牛がイチバンウジに選ばれることや、その追い手に選ばれることは、末代までの名誉といわれるまでに羨望的となっていた。このようなショーとしての代掻きは、観客として見守る者の牛への関心、演者として参加する者の牛への強い愛着がなくしては成り立ち得ない。江戸後期以降、明治期を経て発達してきた畜産業が、それらの感情を醸成したとみられる。

そのほか、森脇の大田植では、明治中期ごろから代掻きで馬鍬をつけなくなったこと、代掻きの後に牛の取引が盛んに行われていたことが注目される。なぜなら、前者は大田植

の人气が畜産業の発達と連動していたこと示し、後者は大田植と牛馬流通との関連を示唆するからである。このように、森脇における大田植は、儀礼としても、祭礼としても、当該地域における畜産業と不可分なものとして理解される。

#### IV. 大田植の主体をめぐる社会状況

しかしながら、ここで森脇の大田植に関していくつかの疑問が残る。それは、次の3点である。

- ①大正～戦前昭和期において、なぜ獣医が大田植を主催していたのか。
- ②比和町に大田植の習俗を伝えたとされる家畜商が主催者とならないのはなぜか。
- ③農耕儀礼であるにもかかわらず、農家が主催しないのはなぜか。

本章では、獣医・家畜商・農家、これら的大田植に関与する諸主体が置かれていた社会状況について分析する。その上で、これらの問題点についても考察する。

##### (1) 獣医をめぐる社会状況

筆者の聞き取りによると、森脇の獣医が大田植を主催していた理由は、地域住民に対して感謝の意を示すためであった。すなわち、獣医が年老いて引退する時、あるいは例年に比べて大きな収入があったときに、大田植を主催したのである。こうした動機の背後には、当該地域での畜産業の発達に伴う、獣医という職業を取り巻く社会状況の変化があったと考えられる。

すなわち、第一には、明治以降の組織的・管理的な牛飼養の発達、飼養戸数・飼養頭数の増加にともなって、獣医の需要が高まったことがある。1884年の『広島縣勸業年報(第二回)』は、畜産業の発達のためには熟達した獣医の存在が最も重要であることを述べたうえで、「縣下従來開業ノ獣醫ヲ算スルニ其數僅カニ三百名余ニシテ之レニ牛馬ノ合計頭



數ヲ割り當ツレハ一人ニ付三百二十五頭ニシテ實ニ過當ノ頭數ト云フベキナリ」という深刻な獣医不足を指摘している<sup>22)</sup>。比婆郡のように、農家で牛飼養が定着していた地域では事態はより深刻であり、1892年の統計では牛馬16,441頭（牛12,323頭、馬4,118頭）に対して獣医は僅かに18人（本免許1人、仮免許17人）である<sup>23)</sup>。それゆえ、獣医一人当たりの牛馬頭数は913.4頭にも上っている。

第二の変化としては、第一の帰結として、獣医に対する急速な資本の投下・蓄積が起こったことが挙げられる。事実、森脇で大田植を主催した2名の獣医は家業としてはともに1代目であり、もともとは両者ともに大きな土地や財産はなかったとされる。明治期に獣医を開業するとたちまち繁盛し、土地建物を集積し、「分限者」といわれる地域の有力者になった。具体的にいえば、山王のH氏は明治中期に移住した新住民であったが、昭和初期には水田8反を所有しており、同時期に移住した家々のリーダー的存在になっていた。また、石ヶ原のN氏も、獣医を営む傍らで水田7反を所有し、土蔵のある大きな屋敷に使用人とともに住んでいたことが記憶されている。隣村の西城町内に別荘があったともいわれ、彼が経済的かつ社会的に高い地位を獲得していたことが十分に理解される。

このように、比婆郡における畜産業の発達には、獣医の医療行為に対する需要を高め、結果、獣医に対する急速な資本の投下・蓄積を引き起こした。それによって獣医の社会的な地位も著しく上昇し、森脇に住んでいた獣医たちも一代で地域の有力者となっていった。こうした社会状況の変化が、彼らの人生の節々において、顧客でもあった地域住民に対して感謝の意を表明する必要性を感じさせたと考えられる。

なお、獣医が大田植の開催を決意すると、以下のようなプロセスで準備を行っていた。まず、森脇のなかで大田植に適した水田を探

し<sup>24)</sup>、その所有者に対して田植をしないほしい旨を伝える。次いで、森脇の各集落にいるサゲに声を掛けて早乙女や大太鼓などの参加者を集めてもらう。また、畜産に熱心な顧客に呼びかけて、比和町全域から牛と追い手とを募集する。農家だけでなく、知り合いの家畜商にも開催を知らせた。当地における獣医と家畜商との関係は深く、家畜商が対処できない怪我や病気は獣医の仕事で、家畜商の取り扱う牛は獣医の主要な患者であった。

## (2) 家畜商をめぐる社会状況

②の問題点についても当該地域での畜産業の発達過程、とりわけ牛馬流通における家畜商の役割の変化のなかに、その理由を見出すことができる。

まず、明治の中ごろに至るまで、牛馬の流通は一般の畜産家に開放されておらず、家畜商によって独占されていた。もちろん、家畜市場は各地（神社の境内や「牛馬宿」とよばれる問屋）で開かれてはいたが、それは1対1の相対で行うものであり、素人が気軽に参加して、公平な取引を期待しうるものではなかった<sup>25)</sup>。そのために、農家は自宅の庭先で馴染みの家畜商と直接に取引するのを常とし、牛馬の流通に対しては深く関わらなかったのである。従って、畜産業が盛んな地域では家畜商のもつ社会的な影響力は甚大であった。県や政府もそれを熟知しており、「農家は古来の慣習上博勞を缺かば牛を得ることも亦賣ることも能はざるなり<sup>26)</sup>」とか、「牛馬商は家畜の取引上極めて枢要の業務にして之が素質の良否は畜産改良上に関する所頗る甚大なるものあるも…<sup>27)</sup>」などと記している。

ただ、家畜商が獣医と大きく異なっていたのは、その数が多過ぎたこと、それによって悪弊が生じていると判断されたことであった。たとえば、帝國農會の『牛馬に關する調査』には、「明治四十四年の牧畜雜誌に依るときは…博勞一名に付き牛馬合せて四十六頭

餘を取扱はれたるの理にして…博勞一名は一ヶ年間に漸く二百三十一圓五十銭の所得に當るに過ぎず。之を博勞の飲食に消費せらるゝ金額に比較するときは殆ど利益なかるべきなり。是を以て勢ひ博勞をして不正手段を行はしむる<sup>28)</sup>とあり、「組合に依りて博勞の弊害を芟除せんとせば諸種組合と同じく組合管理者としては適任者を得ること最も必要にして、又組合員たるものも之が規則並びに目的を熟知するを要し、而も博勞の悪辣手段に對抗するの必要あり<sup>29)</sup>と危機感を強めていた。

こうした状況を打破するために制定されたのが、家畜市場法と牛馬商取締規則（ともに1911年）であった。前者は産牛馬組合による家畜市場の開設を認め、その地位を市町村營のものと同等に扱った。後者は家畜商を免許（鑑札）制とし、彼らの不正を厳しく取り締まるとともに、産牛馬組合の定款で定められた組合立の市場に付すべき義務の履行を行っていない仔牛・仔馬の売買を禁止している。つまり、これらの法律を施行することによって明治政府は、牛馬流通の担い手である家畜商をその現場から遠ざけ、畜産家自身（産牛馬組合）の手による家畜市場をもって牛馬の流通体系を整備しようと試みたのである<sup>30)</sup>。

図5は昭和初期の森脇における牛馬の流通経路を示している。これによると、山王に成牛・仔牛をともに扱う家畜市場があり、農家はそこでの取引に直接参与できるようになっている。この市場は比婆郡産牛馬畜産組合が開設したもので、従来の「牛馬宿」における相対取引ではなく、競り取引によって牛馬の売買が行われていた。自分の牛を売却するときはもちろん、新しく牛を購入する場合でも、見る目のある者であれば誰でも気軽に参加することができたという。それに対して、牛馬の流通における家畜商の介入の度合いを見ると、これまでに比べてかなり低いことが見て取れる。すなわち、家畜商と農家は家畜

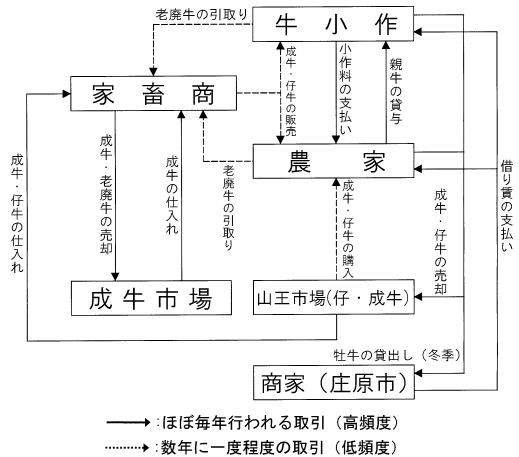


図5 森脇における牛馬の流通経路（昭和初期）  
 出所：現地での聞き取りによる。

市場で売買を交わすほかは、数年に一度、新しい牛と老廃牛を入れ替えるときに、自分で成牛・仔牛の売買を行わない農家が関係をもつのみとなっている。また、地域によっては家畜商との間に結ばれる牛小作の関係も、ここでは基本的には農家間で結ばれている。

このように森脇での牛馬流通の仕組みを見ていくと、それが政府の思い描いた方針に沿ったものであったといえる。つまり、家畜商を牛馬流通の現場から遠ざけ、一般の畜産家によってそれを管理させる政策の効果が明確に表れている。それにより、地域社会における家畜商の影響力は明治・大正期を通じて必然的に低下したものと推察され、そこに大正～戦前昭和期の森脇において家畜商が大田植の主催者とならなかった理由があると考えられる。こうした家畜商の置かれた社会状況を考慮したとき、彼らにとって獣医の開く大田植がいかに商機として大きかったかが理解されよう。

### (3) 社会組織と社会構造

最後に、大正～戦前昭和期に大田植が行われた山王・石ヶ原の2集落に焦点をあて、森脇の社会組織と社会構造について分析する。

それによって、当時の農民たちが置かれていた社会状況が明らかになると同時に、大田植という農耕儀礼を農家自身が主催しなかった理由について、手がかりを得られる。

この分析の作業においては、「組」といった地縁組織のほかに、「名(苗)」という組織にも留意することにした。名は出雲・備後地方に広く分布する同族組織であり、一軒の本家(旧家)を中心にして荒神という屋敷神(祖霊・土地の守護神)を共同で祀るものである<sup>31)</sup>。この同族組織に着目することで、地縁関係や「地主-小作」関係のみならず、当該地域における「本家-分家」関係をも考察することができる。また、前稿で取り上げた川東地区において、名は内部に宗教的・経済的な階層性を有する同族組織であり、地域住民の社会生活を規定する基本単位となっていた。大田植は、同族組織の本家や本家に近い家(いずれも農家)が率先して開催していた。名に注目するのは、前稿における事例との対比を可能にするためでもある。

### a. 社会組織

図6・図7に山王と石ヶ原における組と名の位置を示した。まず、組では、山王は西組・川西組・川東組・中組の4つの組に分かれ、石ヶ原は仲間組・奥組の2つの組に分かれていた。さらに、石ヶ原には組の下に谷という下位組織があり、仲間組は後谷・本谷に、奥組は井尻谷・水谷に、それぞれ二分されていた。次に、名では、山王・石ヶ原の両集落を合わせて9の名を確認できるが、それらと組の分布上における関連性は全く見出すことができない。名では荒神の社を所有する本家を中心に、荒神の祭祀を行っていた。

ただし、当地における名は厳密な意味での同族組織ではなく、昭和初期には、本家と血縁関係にない家でも、名に加入する風潮があった。このことが、西組を除く全ての組の家がいずれかの名に属する状況を生み、同じ名に属する家同士が地理的に近接する分布上の特徴にもつながっている。なお、西組の6軒が名を形成しないで、荒神も祀らないの

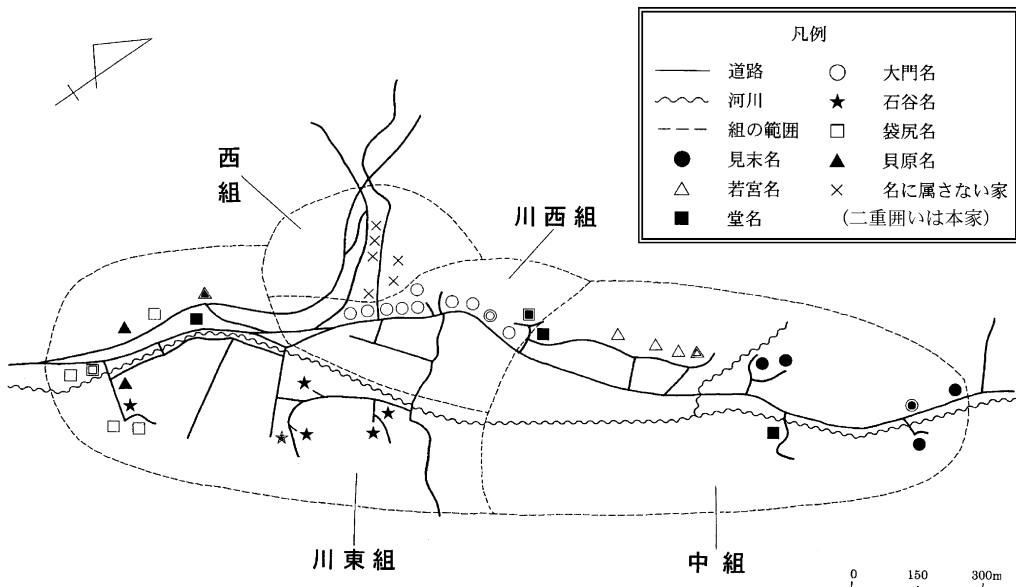


図6 山王における「組」と「名」の範囲(昭和初期)

出所: 現地での聞き取りによる。

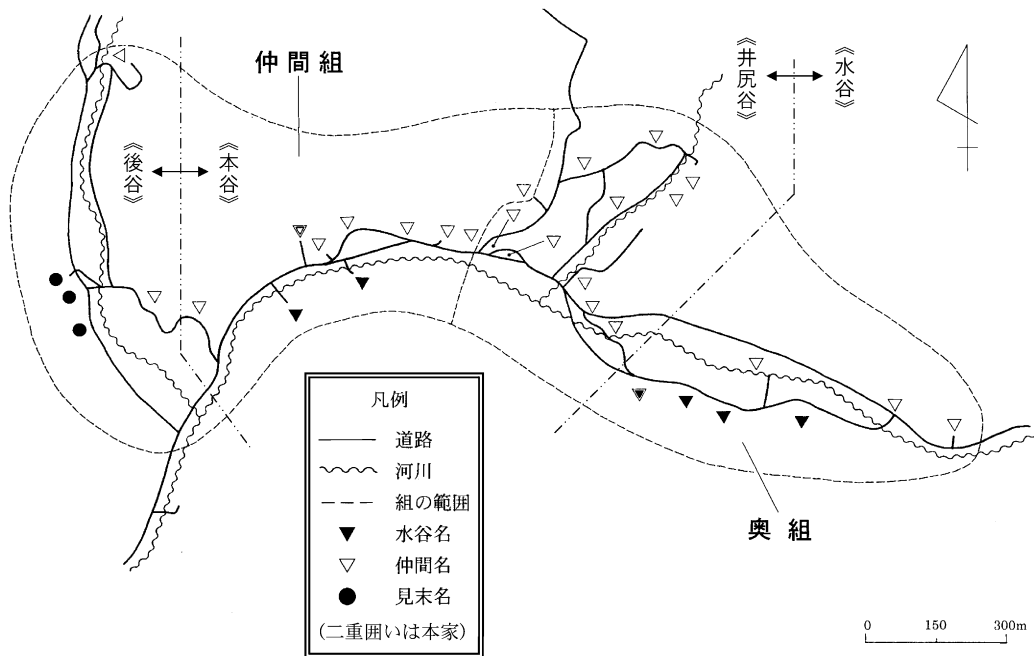


図7 石ヶ原における「組」と「名」の範囲（昭和初期）

出所：現地での聞き取りによる。

は、明治中期、H氏とともに他村から移住してきたためであった。

これら2種類の組織の存在を踏まえて、山王・石ヶ原における社会組織を分析する。表1は、昭和初期の両集落における共同作業の範囲を項目別に整理したものである。この表を範囲の小さなものから順に見ていくことで、当該地域における家々の連帯からみた地域社会の仕組みを明らかにすることができる。

まず、各戸で行う共同作業は、稲刈り・鎌祝い・脱穀・箸祝いの4項目がある。昭和初期、両集落における一戸当たりの水田耕作面積は8.3反と比較的広がったが<sup>32)</sup>、稲刈りや脱穀の作業は、家族だけで行っていた。

次いで、数戸単位と名で行うものがある。前者は水がかりの作業で、組や名の組織とは関係なく、水路を共有する家々で組合を結成して行っていた。名として行うものは荒神祭りである。荒神祭りでは毎年の暮に神官を呼

び、荒神を始め、名内の神々（水神・竈の神など）を一斉に祀る。トウヤは各家の持ち回りであり、見末・堂・大門では3つの名が共同で行うが、他の名では、それぞれ名内（4～22戸）で行っていた。

さらに、組ないし谷で行うものには、見舞い（経済的援助、仕事の手伝いなどを含む）・田植・シロミテ・麻蒸し・葬式の5項目があり、大規模な農作業と、家相互の一次的な相互扶助が該当する。下位組織の有無によって両集落では範囲が若干異なるが、これらを共に行う組織が人々の最も身近な近所づきあいの範囲であった。なお、明治中期に移入した西組の6軒は農業を行ってはいたが、獣医のH家を除いてはいずれも小規模であり<sup>33)</sup>、建設業を主な生業としていた。このために近隣の農家よりも同業者との関係が深く、葬式のように緊急で、人手の要るものについては、比和三河内の建設業に従事する家々から応

表1 山王・石ヶ原における各種共同作業の範囲（昭和初期）

	大字より大	大字と一致	組と一致	組の1/2(俗)	名と一致	数戸単位	各戸
稲刈り							○
鎌祝い							○
脱穀							○
箸祝い							○
水がかり						○	
荒神祭り					○ <sup>1)</sup>		
見舞い				○			
田植			○ <sup>2)</sup>	○ <sup>3)</sup>			
シロミテ			○ <sup>2)</sup>	○ <sup>3)</sup>			
麻蒸し			○				
葬式			○ <sup>4)</sup>				
家普請		○					
道普請		○					
牧場管理		○					
大山祭り		○					
大山神楽 <sup>5)</sup>		○					
秋祭り		○					
大田植	○						

注：1) 見末・堂・大門の3名は共同で祭祀を行う。  
 2) 山王地区における共同の範囲。  
 3) 石ヶ原地区における共同の範囲。  
 4) 西組は三河内・比和の同業者と共同で行う。  
 5) 8月24日、吾妻山の大山神社にて行う。

出所：現地での聞き取りによる。

援を頼んでいた。

大字単位の共同作業としては、大田植を除くと、家普請・道普請・牧場管理・大山祭り・大山神楽・秋祭りの6項目である。これらには、村落における共有財産の管理（家普請・道普請・牧場管理）が含まれており、ムラとしての基本的な機能を担っている。村社である森脇八幡神社の秋祭りなども、地域住民に対して団結（結衆）の象徴にもなりうる。

各種共同作業の範囲から山王・石ヶ原における社会組織の様態を模式的に示すと、図8の3段階の構造となる。すなわち、第一に各戸単位で稲刈りなどの軽微な労働が行われ、第二には組・谷で田植などの重労働や見舞いといった一次的な相互扶助の活動が行われる。この第二段階は、近隣組織のうちの「近隣組」ないし「村組」とみることができる。

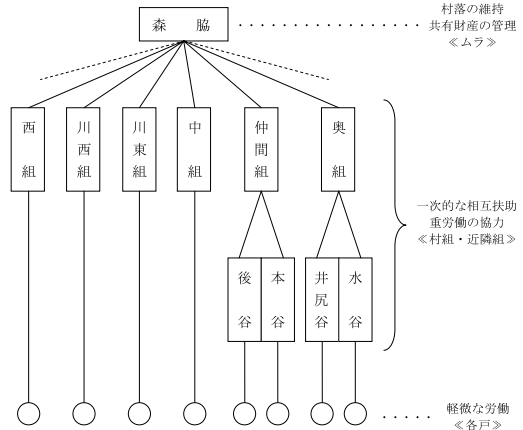


図8 山王・石ヶ原における社会組織とその機能（昭和初期）

大字の森脇は近世村落の範囲にあたり、この第三段階では、ムラとして共有財産の管理が行われていた。そして、こうした組織の根底にある原理に留意してみると、そこには血縁による原理がほとんど介入していないことが分かる。川東地区と異なり、名の機能は荒神祭祀のみに限定され、家相互の連帯は主として地縁によって取り結ばれていた。

### b. 社会構造

表2は、両集落での自小作の別（上段）と水田の自作地面積からみた階層分布（下段）を示している。上段を見ると、昭和初期においては両集落ともに自作農がかなり多くみられ、自小作・小作が少なかったことが分かる。全農家63戸のうち、小作・自小作を合わせた数は17戸（27.0%）に過ぎず、自作農は46戸（73.0%）にも及んでいる。また、下段の階層分布には、比較的大規模な経営をしている農家（10反以上の階層）も30%以上にのぼることが示されている。これらはいくまでも現住者への聞き取り調査に基づいているが、当時の森脇が経済的に自立（自律）性の高い農家を主体として構成されていたと推測できる。

とはいえ、表2の階層分布（下段）に示さ

表2 山王・石ヶ原における階層分布(昭和初期)  
(単位:戸)

		山王	石ヶ原
自小作の別	自作	24	22
	自小作	5	0
	小作	5	7
	非農家	9	3
水田の自作地面積 (非農家を除く)	0反	5	7
	～2反未満	3	0
	～4反未満	6	4
	～6反未満	3	6
	～8反未満	3	4
	～10反未満	1	2
	10反～	13	6

出所:現地での聞き取りによる。

れるのは水田の自作地面積であり、所有水田の面積ではない。従って、大規模な土地所有者がいた場合、小作地の面積は反映されないことになる。そこで、現地での聞き取りにより、「地主-小作」関係について補足すると、山王の1軒が5町歩を小作に出していたほかは、両集落に大地主は存在していなかった。このことは、先の推測を裏付けるとともに、突出した農家の不在も指摘できる。

表3は荒神の社を所有する本家の経済的な優位性を、その他の家との比較のもとに示している。これによって、両集落における「本家-分家」間の経済的な格差が明確になる。この表から以下の3点を指摘できる。

- ①本家が所有する水田自作地面積の平均は、その他の家比べて1.5倍になる。
- ②本家が所有する牛の平均頭数は、その他の家比べて1.6～1.7倍になる。
- ③本家が自作農である割合は55.6%、その他の家のそれは75.9%にのぼる。

このように、本家は、その他の家比べて若干多くの財をもっていることが分かる。しかしながら、すべての本家が自作農というわけではない。また、本家以外でも土地を借用する家は、全体の24.1%に過ぎない。従って、両者の経済的な格差はかなりの程度まで縮小しているといえる。このことは、人々の共同生活の在り方(社会組織)において、血縁による原理がほとんど介在していなかったことと対をなすと考えられる。

以上、本節をまとめると、昭和初期の森脇では、「地主-小作」や「本家-分家」といった上下階層関係が地域社会の仕組みに与える影響が極めて小さかったと理解できる。むしろ、人々の社会生活を律しているのは主として地縁であり、経済的・社会的に独立した農家同士が、ほとんど対等な関係を取り結んでいる。この点は、前稿で取り上げた川東地区とは対照的であり、川東を「同族結合の村」とするならば、森脇は「講=組結合の村」とみなすことができる<sup>34)</sup>。こうした社会構造のもとにあつては、特定の農家が率先し

表3 山王・石ヶ原における本家の経済的優位性(昭和初期)

	山王		石ヶ原		合計	
	本家	それ以外	本家	それ以外	本家	それ以外
自作(戸)	4	20	1	21	5	41
自小作(戸)	2	3	0	0	2	3
小作(戸)	1	4	1	6	2	10
非農家(戸)	0	9	0	3	0	12
農家一戸あたりの水田自作地面積の平均(反)	9.7	6.1	6.0	5.6	8.9	5.8
農家一戸あたりの牛所有頭数の平均(頭)	2.6～2.9	2.0	3.5	1.6	2.8～3.0	1.8

出所:現地での聞き取りによる。

て大田植を行う動機は比較的小さかったと考えられよう。すなわち、川東地区の大田植は、その宗教的・非宗教的な表現を通じて主催者の優位性を示し、同族組織によって構成される社会構造を維持・強化する機能を担っていたと推測されたが、社会構造が異なる森脇ではその必要性もなかったといえる。

しかしながら、こうした地域社会の形態が長期間にわたって存在したとは考えられない。というのも、大正期には地元で権勢を振るっていた鉄山師が凋落し、森脇では大きな社会変動があったと推察されるからである。たとえば、石ヶ原の鉄山師M家は、江戸時代より山林を切り開いて鉄山業を営む傍ら、里でも20町歩を超える水田を所有し、多くの小作人を抱えていた。しかし、大正初期には経営が悪化して鉄山業を廃業し、所有していた土地を全て売却してしまった。石ヶ原をはじめ近隣の集落には、そのときに土地を取得して自作農になった家も多くあった。従って、森脇における「講＝組結合の村」としての性質は、こうした社会変動のあとで出現したものともみることができる。

## V. 大田植と地域社会との関係性

### (1) 大田植の社会的基盤

これまでの分析結果を踏まえると、森脇における大田植の社会的基盤に関して以下のような推論を立てることができる。

まず、言い伝えによると、大田植の習俗が出雲地方から比和町に伝えられたのは、明治の初めごろである。出雲地方から移り住んだ若林早助が比和町で家畜商を開業し、自らが所有する牛に対する安全祈願を込めて儀式を行った。この伝承内容の正否は定かでないが、具体的な人名・地名・年代が登場すること、他にも家畜商によって伝えられたことが明確な地域が存在することから<sup>35)</sup>、信憑性は高いと推測される。比和町の一帯は江戸後期から畜産業の盛んな土地であったが、明治初

期における牛馬流通は家畜商が独占しており、彼らの地域社会における経済的・社会的な影響力は極めて甚大であった。そうした状況下において、家畜商が多く地域住民の参加を募り、大規模な儀礼・祭礼を主催していたと仮定しても、大きな矛盾点は感じられない。明治の初めごろには、森脇でも家畜商が大田植の主催者であった可能性もある。

しかし、明治中期～大正期を通じて、大田植の社会的基盤は大きく変化したと考えられる。すなわち、この時期に政府は積極的な畜産政策を展開し、比婆郡は仔牛の生産・育成地域として確立した。この過程で家畜商が牛馬流通に関与する度合は著しく制限され、畜産組合がその役割を演じるようになった。事実、昭和初期における森脇の牛馬流通では、家畜商の介在はわずかであった。社会状況の変化に伴って、地域社会における家畜商の影響力は必然的に低下したと推察される。

その一方で、地域社会での影響力を増したのは、当時、広島県下で人員の不足していた獣医であった。明治以降に起こった組織的・管理的な牛飼養の発達、飼養戸数・飼養頭数の増加は獣医による医療行為の需要を高め、彼らに対する急速な資本の投下・蓄積を引き起した。森脇でも山王のH氏、石ヶ原のN氏が開業から一代で財をなし、大正～戦前昭和期にはそれぞれ「分限者」といわれる存在になっている。ちなみに、当時の森脇では、鉄山師が廃業したこともあり、「地主－小作」関係、「本家－分家」関係といった上下の階層性が弱まり、地域社会は自立した農家によって構成されるようになった。つまり、家畜商の影響力の低下、突出した農家の不在という社会状況において、獣医は新興の有力者として成長していった。

大正～戦前昭和期の森脇で大田植を主催した獣医は、引退あるいは例年以上の収入があったときに、大田植を「地域住民への感謝」として主催した。彼らは地域社会におい

て成功を取める一方で、自らの顧客でもある地域住民との間に生じる軋轢を解消する必要性を感じていた。農耕儀礼の形式をもつ大田植は、このための装置として選ばれたと考えられる。また、大規模な儀礼・祭礼を私費で開催することが、彼らの成功者としての自負心や名誉心を満たしていた可能性もある。

このように、大田植が、いかに大正～昭和戦前期における畜産業の発達と結びついて存続してきたかが分かる。それは、政府による畜産政策の実施という、近代化のプロセスをより大きな背景にもっていた。もちろん、こうした理解はあくまで推論の範囲に留まるものであり、多くの課題を残している。それらを解決するためには、同地における家畜商と農家、獣医と農家との関係性の変化を、彼らの営業日誌などの近代文書によって裏付けることがまず求められる。さらに、昭和初期における森脇の経済的均一性も、古老への聞き取り調査に基づく理解であった。今後、別角度からの分析を加えて、議論の正確性を高める必要があると考える。

## (2) 大田植存続の地域的意義

『民俗学辞典』は、大田植について「村の一定の田に對して、とくに大規模な合同植を行う風」、「田主の統制のもとに、田の神を祭り、田植唄を歌いはやし、オナリの運ぶヒルマの饗應を神とともに食ひ、村中興奮のうちに、早朝から夕暮れまで一日に作業を終えるハレの行為」と定義している<sup>36)</sup>。このような見解に従えば、大田植の地域社会における意義とは、ムラの農民たちが五穀豊穡のために一丸となって行事を遂行するところにあった。しかしながら、森脇での事例は、それとは異なった様相を呈す。大田植に関与した主体は、獣医・家畜商・農家のように複数の業種にわたる。また、参加者も基本的には主催者である獣医の人間関係から集められ、牛と追い手の募集範囲にみられたごとく、森脇と

いうムラの範囲にとどまらなかった。

さらに、大田植の目的からみても、それは参加者の立場に応じて異なっていたといえよう。すでにみたように、大田植の代掻きは明らかに牛や牛の操縦を競うショーであった。そこに参加する牛の所有者や追い手たちは、その「演者－観客」という構図のなかで、自らの畜産家としての腕を示すことを目的にしていた。これに対して、大正～戦前昭和期、牛馬流通の現場から遠ざけられていた家畜商にとって、畜産家の集まる大田植は一大商機に他ならなかったと推察される。早乙女・大太鼓などの諸役として参加する者、会場を取り巻く見物人たちにとっては、シロミテを祝う格好のハレの日であった。とくに若い男女にとっては、数少ない出会いの場として理解されていたのである。もちろん、五穀豊穡や牛馬安全に対する祈願は、大田植の参加者全員に関係する儀礼上の目的であった。しかし、その重要性や儀式への参加の度合いは、獣医・家畜商と農家、代掻きに参加する畜産家と一般の者とはおのずと異なっていた。森脇の大田植におけるナオライの欠如は、この参加者の多様性を如実に表している。

以上のように、森脇での大田植においては、一つのまとまりをもった集団（たとえばムラなど）が、共通する宗教的・社会的な目的を認識して、その行事を遂行したのではなかった。むしろ、それに参与する諸主体の異なった思惑が交錯するところに、大田植という行事が成立していたといえる。そうであればこそ、内部にさまざまな職業や階層などを含んでいたはずの地域住民に対して一律に感謝の意を表したいとする、主催者の漠然とした開催目的が果たされたのではないだろうか。当地において大田植が人気となり、長らく地域住民に愛好されてきたのは、先に述べた社会的基盤はもちろんのこと、大田植に関わる諸主体の思惑を結び合わせる様式を、この行事が獲得したためと考えられる。



## VI. おわりに

大田植の習俗を地域社会との関係性のなかで捉えるという研究目的から、前稿では戦前昭和期の豊松村川東地区における事例を、本稿では大正～戦前昭和期の比和町森脇における事例を取り上げて分析を行った。その結果、従来の大田植研究を通じて提示されてきた同習俗のイメージと大きく異なる事例の存在が明らかになってきた。

まず、大田植は伝統的な田植の様式、あるいは典型的な稲作儀礼として、毎年繰り返行われてきたとみられる傾向が強くある。しかし、筆者が示した両事例とも行事の開催は不定期であり、頻度も必ずしも多くはなかった。森脇では、伝承活動として行われたものを除くと、大正期にわずかに2回の開催である。また、典型的な稲作儀礼という認識に付随して、大田植の主催者は水田稲作を生業とするとの了解が一般的であった。それに対し、本稿では家畜商・獣医などの非農家が主催者であった。こうした事例は、宮本常一や牛尾三千夫が示唆しているが<sup>37)</sup>、従来ほとんど研究対象として取り上げられなかった。

大田植の社会的基盤の分析を行うなかで、同習俗が神々に稲の豊穰や牛馬の安全を祈願する宗教儀礼であるだけでなく、それぞれの地域社会の様態に即して個別の社会的な意義を有した習俗であることも明らかになった。前稿の川東地区では、同族組織に基づく階層的な社会構造の中で大田植に社会的な意義が発生していた。それに対して、森脇では、家畜商の地位の低下や獣医の台頭といった畜産政策の影響に加え、血縁に基づかず、自立した農家で構成される社会構造の存在が、結果として当地の大田植に重層的な意味合いをもたらしていた。筆者は、こうした地域社会との関係性のなかで生み出される社会的な意義がむしろ重要であり、習俗を存続させる大きな要因になっていたと考える。

しかしながら、これらの事例分析から導き出された筆者の主張が、大田植全般の議論において、どれほどの一般性をもち得るのかは、現段階では不明である。両事例は大田植が伝承される中国地方のうちでも、備後地方の北部地域における状況の一端を示すに過ぎない。継続的な事例研究の蓄積、ならびに事例相互の比較研究を今後の課題としたい。

(岡山大学社会文化科学研究科・院生)

### 〔付記〕

本稿の作成にあたり、岡山大学大学院社会文化科学研究科の内田和子先生、北川博史先生にご指導いただきました。また、現地調査にあたっては、若林光男氏、田辺章氏をはじめとする庄原市比和町の皆様に多大なる協力を賜りました。心より感謝申し上げます。なお、本稿の骨子は、2008年3月の日本地理学会（於獨協大学）で報告した。

### 〔注〕

- 1) たとえば、①柳田國男「都市と農村」『定本柳田國男集』16、筑摩書房、1969（初出1929）、328～329頁。②牛尾三千夫『大田植と田植歌』、岩崎美術社、1977、94～173頁。
- 2) 山路興造は、『栄華物語』に記された田植興について、「これはまさに今日中国地方の山間部に伝承されている囃子田に、さして違わぬ情景である」としている。①山路興造「農夫・田婦の楽」（藝能史研究会編『日本芸能史』第1巻、法政大学出版局、1981）、274～275頁。また、植木行宣も大田植について、「遊興の田植をありありとしのばせる中国山地の囃田（花田植）」という記述をしている。②植木行宣「田楽の村」（藝能史研究会編『日本芸能史』第2巻、法政大学出版局、1982）、177頁。
- 3) こうした大田植研究における地域社会の不在に関しては、近年、橋本裕之が牛尾三千夫の『美しい村』に対する批判的検討を通じて指摘している。橋本裕之「近代の復讐—牛尾三千夫の『美しい村』をめぐって

- 一]、法政人類学41、1989、2～19頁。
- 4) 拙稿「地域社会との関係からみた大田植の習俗—昭和戦前期・広島県豊松村川東地区における事例—」、人文地理59-5、2007、1～21頁。
  - 5) 現地での聞き取り調査は、2000年12月～2008年5月にかけて合計5回行った。その間、比和町郷土芸能振興会による大田植の実演を二度見学した(2004年5月30日・2008年5月25日)。主なインフォーマントは、森脇に在住の男性(1916年生)と比和に在住の男性(1924年生)の2名である。
  - 6) 比婆郡は1898(明治31)年、恵蘇・奴可・三上の3郡が統合されて誕生した。その後、1954(昭和29)年、庄原町と敷信村ほか6村が庄原市として合併し、比婆郡から分離した。そして、2005(平成17)年3月、比婆郡は庄原市・甲奴郡総領町と合併し、新設された庄原市の一部となった。
  - 7) 羽部義孝『家畜改良學とその應用』、産業圖書株式会社、1949、281～285頁。
  - 8) ①下中邦彦編『広島県の地名』(日本歴史地名体系35)、平凡社、1982、94～95頁。②「角川日本地名辞典」編纂委員会編『角川日本地名辞典34 広島県』、角川書店、1987、817頁。
  - 9) 口頭で伝承されているほか、無形民俗文化財の指定に際して作られた報告書にも記載がある。広島県比婆郡比和町・比和町郷土芸能振興会『無形民俗調査表 比和牛供養田植 昭和45年6月21日実施』、1971。
  - 10) 日野篤信編『比婆郡誌』、臨川書店、1985(初版1912)、3頁。
  - 11) 広島県内務部第二課『農事調査書』五、広島県内務部第二課、1891、104頁(明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料』補巻94、明治文献資料刊行会、1973、に所収)。
  - 12) 前掲11) 104頁。
  - 13) 「広島藩御覚書帖」および『芸藩通志』の数値による。①広島県編『広島県史 近世資料編 I』、広島県、1973、41～82頁(「広島藩御覚書帖 一」)。②頼杏坪ほか『芸藩通志』、国書刊行会、1981(1907～1915年刊の複製)。
  - 14) ①広島県編『広島県史 近世 II』、広島県、1984、781頁。②岩永 実「中国山地のたたら」、石田 寛・岸本 実・浜田清吉・山崎修編『中国と四国』(日本地誌ゼミナール IV)、大明堂、1961、82～100頁。
  - 15) 石田 寛「農業地域における牧畜」、野間三郎編『生態地理学』、朝倉書店、1961、24頁。
  - 16) 東城町史編纂委員会編『東城町史 近代・現代・通史編』、東城町、1997、324頁。
  - 17) 広島県第一部農商課『広島縣勸業年報』第6回、1891、56頁。
  - 18) 現地での聞き取り調査による。
  - 19) サンバナエの宗教的な意味については、①柳田國男「田の神の祭り方」『定本柳田國男集』13、筑摩書房、1969(初出1949)、370～394頁。②牛尾三千夫「さんばい祭りについて」『大田植の習俗と田植歌』(牛尾三千夫著作集2)、名著出版、1986、76～81頁。などで議論されている。
  - 20) 比和町郷土文化保存伝承施設・比和町立自然科学博物館『牛供養田植—牛は農宝、豊穰への祈り—』(第10回特別展・展示開設用パンフレット)、1991、11頁。
  - 21) 同習慣については、馬鍬を付けなくとも土が柔らかくなるため、ウシクヨウの日に牛に労働をさせないため、という地元での解釈もある。
  - 22) 広島縣勸業課『広島縣勸業年報』第2回、1884、36頁。
  - 23) のちに比婆郡となる恵蘇郡・奴可郡・三上郡の数値を合計して算出した。広島縣第一部農商課『広島縣勸業年報』第7回、1892。
  - 24) 森脇において大田植に適した水田とは、面積が2反程度、なるべく綺麗な長方形をしていること、三方を山に囲まれていること、これらの条件を満たすものをいう。
  - 25) 『日本馬政史』には、新潟県推谷馬市・福島県白河馬市・鳥取県大山牛馬市を例として、当時の取引状況が具体的に報告されている。帝国競馬協会『日本馬政史 四』、原書房、1982(初版1928)、674～678頁。
  - 26) 帝國農會『牛馬に関する調査：第一編 牛に関する調査』、1915、87頁。
  - 27) 広島縣畜産組合聯合会「広島縣之畜産」、昼

- 田 栄編『広島県農業発達史 資料編』, 1984 [初出1931], 広島県信用農業協同組合連合会, 747頁。
- 28) 前掲26) 88頁。
- 29) 前掲26) 88頁。
- 30) ①農業発達史研究会編『日本農業発達史』第5巻, 中央公論社, 1955, 211~292頁。  
②小野茂樹「和牛せり市の展開とその社会的考察」広島大学水畜産学部紀要8, 1969, 57~76頁。
- 31) 中国地方の名・荒神については, 藤井の研究に詳しい。藤井 昭『宮座と名の研究』, 雄山閣出版, 1987, 525頁。
- 32) 聞き取り調査により算出。ちなみに, 1930 (昭和5)年の広島県における水田の耕作面積は, 農家一戸あたり3.9反である。広島県知事官房『広島県統計書』, 広島県, 1931。
- 33) 聞き取り調査によると, 昭和初期における水田耕作面積は0.5~3.8反であった。
- 34) 福武の村落類型による。福武 直「日本農村の社会的性格」『福武直著作集』4, 東京大学出版会, 1976 (初出1949), 37~50頁。
- 35) 島根県安来市広瀬町西比田には, 明治初期, 阿部田嘉右衛門という家畜商が安芸地方 (備後地方という人もある) から大田植を習ってきたとする伝承がある。彼が大田植を主催したときに建立したとされる石碑も残されており, そこには願主として阿部田嘉右衛門の名が刻まれている。
- 36) 民俗学研究所編『民俗学辞典』, 東京堂出版, 1998 [初版1951], 74頁。
- 37) ①宮本常一「広島県山県郡八幡村八幡及樽床」『中国山地民俗採訪録』未来社, 1979 (初版1976), 126頁。②牛尾三千夫「供養田植」『大田植の習俗と田植歌』, 名著出版, 1986 (初出1968), 226~245頁。

The Meaning of “*Otaue*” for the Local Community in the Period between the Taisho and the Pre-war Showa Era:  
Case Study of the Relationship with the Livestock Industry in Moriwaki,  
Hiwa Village, Hiroshima Prefecture

TAKANO Hiroshi

There are a number of research papers and essays on the custom of *otaue* (rice-planting festival) in the Chugoku Region, and it has often been investigated from two viewpoints: (1) Japanese folklore studies, and (2) historical studies of *dengaku* (Japanese performing arts). In the former, this custom has either been treated as what remains of traditional rice-planting in Japan or as a typical ritual for the autumn harvest. In the latter, it has been emphasized as a means of clarifying preliminary steps toward the establishment of *dengaku*. Researches on *otaue* have been driven by such academic interests, and many papers have been written on the subject. However, in these studies, the relationship between the festival and the local community has commonly been neglected. Attention has mainly focused on issues related to *otaue* itself, concerning the various rituals involved in worshipping God.

Building on an awareness of these issues, this paper focuses on a particular case of *otaue* that was held in Moriwaki, Hiwa Village in the period between the Taisho era and the pre-war Showa era, and analyzes the relationship between the custom of *otaue* and the local community. The following two points are elucidated through a consideration of the relationship with the livestock industry (Chapter 3) and analyses of the social situations surrounding each of the participants (Chapter 4): (1) the social foundation of *otaue*, and (2) the meanings of this custom for the local community. The conclusions of the paper (Chapter 5) are summarized as follows:

- (1) In this period, there were very few large-scale landowners. The local community of Moriwaki was composed of small and autonomous farming households. Decline of the iron industry in the Meiji-Taisho period and bankruptcy of the families that had operated mines contributed to such a social structure.
- (2) On the other hand, the livestock industry of this area had been dramatically developed by the government industrial policy that became effective after the Meiji era. During its development, animal doctors rapidly made their fortunes and achieved a higher social standing.
- (3) There was deep discord between animal doctors, emerging leaders of regional society, and local people. In order to show their appreciation and resolve the situation, they hosted *otau* as a big festival. *Otau* was held when they retired or when their earnings were greater than in usual years.
- (4) However, the participants of *otau* lacked unity. The significance of *otau* depended on their position in the festival (cattle merchants who gathered to trade their animals, farmers and breeders who tried their skill in the soil puddling competition, young men and women who wanted a place to meet, and so on).
- (5) *Otau* existed at the point where the motives or interests of a variety of people crossed, and the festival acquired a conventionalized style in such a situation.

**Key words:** *otau* (rice-planting festival), local community, livestock industry, animal doctor, Hiwa village, Hiroshima Prefecture